

平成 27 年 2 月 15 日（日）、自由が丘産能短期大学において、第 42 回関東・東北ブロック研究会が開催された。34 人（申込 37 名）が出席し、向後千春先生の基調講演をはじめ研究発表、バズセッションなど活発な意見交換が行われ、充実したブロック研究会の一日であった。

総会あいさつ

変化に対応するブロック研究会

関東・東北ブロック研究会リーダー
高橋 真知子（常磐短期大学）



今後さらに進展するであろう「ロボット社会」では、「タクシー運転手の 97%がロボットになるだろう」といわれ、

何らかの介助を必要とする場合のためにだけ、3%の人間が残るとありました。その話を聞いて、二つのことを考えました。

まず、97%の人は、どんな仕事をするようになるのだろうか。人間に残されている仕事とは何だろうか。次に、改めて「人間とは何か。人間にしかできないこととは何か」についてです。

そのような社会を生き、社会を担う学生たちに、私たちは何を伝え、どのように導いたら良いのでしょうか。ご一緒に考えていきましょう。

講演

「学習効果を高める ICT の活用法～反転授業も含めた授業設計

早稲田大学人間科学学術院
教授 向後千春

1. はじめに

今日は反転授業と大学授業の設計・実践についてお話しします。

反転授業とは e ラーニングと普通の対面授業を組み合わせたものです。組み合わせた授業をブレンド型授業といいます。ブレンド型授業は 2000 年ごろから e ラーニングだけでやると半数以上がドロップアウトしてしまう対策として始まったものです。対面授業を組み合わせるにより、みんなと一緒にやっているイメージが残り、相乗作用で e ラーニングをやってもうまくいくのではないかと考えられていました。



2. 反転授業とは

今回の反転授業とは数年前アメリカの高校の先生が考えた e ラーニングと対面授業を組み合わせたものですが、今までと違うのは e ラーニングを予習として使わせるというものです。そして e ラーニングも先生自身の手作りで時間の短いものになりました。それを e ラーニングで見せてもらった結果、皆がよく勉強するようになったということです。そういうことで反転授業がこれから広まろうとしています。それと並行して文科省のほうでもこれからはアクティブラーニングという学生の思考や表現を引き出しその知性を鍛える双方向の授業への転換を進め

ています。これはただ聞いて座っているだけではだめということで、議論や実習をしたり、いろいろなプロジェクトをしたりというような頭と体を使うような授業をしてくださいということです。今までやっていた授業というのは e ラーニングに置き換えられると考えられます。

ブレンド型授業は対面授業と e ラーニングを組み合わせるのですが、反転授業の場合は予習型と復習型と補習型があります。その中で予習タイプの反転授業が今脚光を浴びています。

3. e ラーニングの神話

e ラーニングには神話みたいなものがあって「ドロップアウトしやすい」「簡単にさぼれる」と言われていますが、必ずしもそうではありません。その解決策として簡単なテストをすればよいのです。対面授業についても「グループワークは効果的である」「グループワークは自発性を引き出す」と言われ、これを根拠に文科省はアクティブラーニングを進めていますが、必ずしもそうではないです。実際はグダグダのグループワークになってしまうこともあります。すべてを学生に任せてしまうとそうになってしまいます。それはまずいので、どういふふうにグループワークをやっていくかという方針を立てることが必要です。

4. 反転授業の実際

では、反転授業をやっていくための実際のことについてお話します。まず、ビデオを作る必要があります。最初はスタジオで録画する形でしたが、今は自分の研究室でカメラのついているパソコンでとっています。ソフトとしてはテックスマス社のカムタジアを使っています。ビデオをとる時に講師の顔を出すことは特に効果があるわけではないのですが、出すと臨場感があり講師のプレゼンスという意味では有効で、それが学生の動機づけにつながります。ビデオを作るときには必ず最後にクイズをつけることが重要です。そうすると視聴率があがります。もう一つは対面授業につながるような宿題を出しま

す。ショートレポート形式で 200 字～400 字程度のもので。ビデオは大学で LMS があればそれを利用すればよいし、なければ Youtube を利用すればよいです。

5. 個別ワークとグループワーク

次はビデオの個別ワークと対になるグループワークについてお話します。ビデオで講義をすると対面では講義をする必要がなくなります。そのため対面授業はグループワークが中心となります。人数の多い場合のグループワークを分割統治をします。また、グループの作り方もこちらで指定します。学年、性別を指定してランダムに 5～6 名で作ります。まずアイスブレイクから始めます。自己紹介やマイブームを入れた 1 分程度のコメントをしてもらいます。その後実

習課題をします。必ず具体的なものを用意します。これは「ハ



ノイの塔」というゲームをやっています。そしてフリーライダーを作らないようにそれぞれの役割を分担します。議論させたら必ず紙にまとめさせて、それをプレゼンテーションをするようにします。人数が多いのでグループ同士でプレゼンします。グループワークのポイントはひとつの活動を短くする、最大でも 15 分で、5 分とか 8 分で完結させます。

6. 大学授業の設計と実践

次は大学授業の設計と実践についてお話します。まずビデオ授業を作ってください。これは予定がなくても損なことは絶対はないので作ってみてください。文科省も積極的にやってくれと言っていますからよい時期です。ポイントは 1 セクション 10 分です。スライドも 10 枚以内でできます。だいたい 5 枚

で 10 分が標準です。台本は作らないでスライドを見ながら話します。セクションの終わりに 1 問か 2 問クイズを作ります。著作権を問題なければ公開してください。グループワークについてはグループのサイズ、グループの設定、グループワークの時間などがポイントです。

また、学生とのコミュニケーションツールとして大福帳というものを使っています。これは A4 版の特厚紙で授業回数分の枠を印刷し、授業終了後に学生が感想を書いて提出、翌週教員が返事を書いて返却するというシステムです。これを使うことにより、出欠の管理ができるようになります。また、履歴が一目でわかり、学生の授業の振り返りにも役に立ちます。

次にテキストの設計と政策については、まずビデオを作る、グループワークでも材料を集めておく、2 年目にビデオ講義を文字起こしてテキストを作る、3 年目にテキストの完成版を作る、そして公開をする、そうすると出版社からオファーがあったりもします。

またどの授業の中でもスキルトレーニングをしています。15 分くらい時間をとって 1 分間スピーチや 4 コママンガを作ったりします。その結果スピーチすることに慣れるしその場で考える思考の訓練になります。

以上で反転授業、授業設計についてのお話を終了します。ありがとうございました。

助成研究発表①

テーマ：「中期キャリアを見越しての就業前キャリア教育の研究」

齋藤裕美（多摩大学）佐藤美津子（多摩大学）
長谷川美千留（八戸大学）田中敬子（コムネット）

大学のキャリア教育は、社会人基礎力育成に主眼が置かれていたが、グローバル化する企業経営のもとで、雇用・就労形態の多様化、大学生の 3 割が 3 年で退職、殆どが中小企業に就職、

非正規労働者として働く若者は 36% である。中小企業の 4 割以上が海外展開を行っており、グローバル人材不足、不足を解決するための人材確保と育成への取り組みがグローバル経営の最も深刻な課題である。

また、派遣労働が大学生にとって新たな労働の選択肢となるかについては、「やりたくないことにどう向き合うか」の教育が重要で、非正規労働の負の側面を理解させること。就職活動開始時期の後ろ倒しの影響は、学生にはデメリットの方が大きく、多くは中小企業に就職していくため、キャリア支援課はきめ細かな支援と中小企業が求めるグローバル人材を育成するキャリア教育の構築と学生に中期キャリアを意識させる教育の検討が必要であるといえる。



助成研究発表②

テーマ：「短期大学卒業生の組織社会化を促進させる職場での学習機会についての調査」

佐野達（自由が丘産能短期大学）

藤原由美（自由が丘産能短期大学）

関憲治（自由が丘産能短期大学）

本研究は、組織社会化戦術から組織社会化、そして組織適応に至る組織社会化研究のフレームワーク（例えば高橋, 1993; Takeuchi & Takeuchi, 2009）に依拠し、短期大学卒業生の組織社会化を促進させる職場での学習機会について調査を行った。Gundry & Rousseau (1994) が新人に対する調査で用いたクリティカルインシデント法を参考に、短期大学卒業生 5 名に対してヒアリング調査を実施し、組織社会化の

促進につながる語りを記述した。調査から入社後の職場での学習機会としての「社会的社会化



戦術」「組織社会化」の具体的な体験を抽出することができた。しかしながら、本調査ではそれらの経

験がいかに組織適応につながっているのか（組織社会化の結果）まで検討することができなかつた。また、単一企業（組織）のキャリアだけではなく境界のないキャリア概念からのさらなる検討が必要である。

個人研究発表 1

テーマ：「ピア・サポートを用いた就職模擬面接の効果」

藤原由美（自由が丘産能短期大学）

ここ数年続いていた経済不況による就職難のため、短大や大学では、就職支援策を講じる



ことが急務となっている。そこで本研究では、短大生の就職支援を強化するために、相互評価の視点からピア

・サポートを活用した就職模擬面接プログラムを設計し、実際に運用してその効果を検証することを目的とした。

2012 年度と 2013 年度に自由が丘産能短期大学で実施した就職模擬面接の結果、面接を受ける 1 年生にとっては、面接の流れを知るだけでなく自分の改善点を知ることができること、ピア・サポーター（2 年生）からだけでなく、グループ面接の他のメンバー（1 年生）からも学

ぶことができることがわかった。さらに、2 年生にとっても、後輩である 1 年生に指導やアドバイスをすることが自分自身の振り返りの機会となり、やりがいや達成感が得られるという効果があることがわかった。最後に今後の課題として、効果を統計的に確認するための効果測定と分析方法の検討、研究結果を一般化するための継続調査の必要性を示した。

個人研究発表 2

テーマ：もてなしと魅力行動

古閑博美（嘉悦大学）

ホスピタリティ・ソサエティ (Hospitality Society もてなし合い共に生きる社会) におけるもてなしを、文献研究と発表者が提唱する魅力行動（行動の質・量・形・意味に魅力を付与した行動（古閑博美 2001））の観点から考察した。



善きもてなしを実行する社会をホスピタリティ・ソサエティとし、必要な要件として、作法 (manners)、成熟 (maturity)、謙虚 (modesty)、知性 (mind)、道徳 (moral) の「5M」を挙げた。もてなしを文献から考察し、もてなす主体（情・知・意の総体としてのひと）の魅力行動を、「三立（立腰・立額・立身）」「ささき親切（さっそく・さわやか・さりげない）」「NHK（にこにこ・はきはき・きびきび）」の観点から強調した※。

魅力行動の実践たるもてなしは社会で必要とされており、学生の資質向上に有効な実学としてキャリア教育と密接につながっている。

※「立腰」教育は森信三、「立額」及び「ささき親切」は古閑博美が提唱。



実践事例報告 1

テーマ：「現場対応力育成のための接遇教育」

西村この実（常磐短期大学）

社会人として求められるコミュニケーション能力、協調性、時間管理、目標管理などの意識を身につけることができることを目的としている授業において、



現場対応力向上のための接遇教育の初期においては、接遇教育を十分に受けてこなかった学生の苦手意識を軽減させ、ビジネス社会の現状を経験させることを目的とした授業づくりの実践事例報告である。現場で対応できるレベルの接遇力の基本となるコミュニケーション力向上を考慮したワークを取り入れ「自分の役割を理解し、「自分が必要とされている」という気持ちを持ち、グループワークの導入時やグループ内の活性化としても、活用できる事例である。社会での接遇教育で求められるホスピタリティーマインドの育成と現場で自信をもって取り組む姿勢を促すことができる演習過程の紹介である。

は、1989 年から始まった短大留学プログラムの変遷、大学での科目の位置づけ、実施に至る背景（経済産業省、文部科学省の動向）を確認し、本学の留学プログラムの起源となる特設留学研修課程の成果を明らかにし、留学がキャリア形成にどのように影響したか、卒業生の 20 年後についてインタビュー調査結果を元に明らかにする。留学プログラムの成果は、①TOEIC スコアが伸びる（社会人基礎力）②自然な英語が話せる（外国語でのコミュニケーション能力）③異文化体験により、海外及び異文化への興味が高まる（異文化理解・活用力）である。卒業から 20 年後のキャリア形成については、①英語学習意欲の継続・強化②卒業生間の仕事情報の共有化③外資系企業への転職希望④精神面の強化、ポジティブ思考⑤海外の方に対する自己主張が挙げられた。今後の課題として、事前授業をどう提供できるかであり、現在、大学での留学プログラムは英語力向上だけでなく、異文化体験の場として、32 日間の英語力強化のための集中講座を実施している。

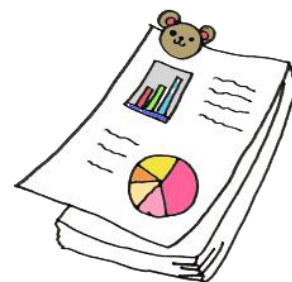


実践事例報告 2

テーマ：「産業能率大学における多様化する学生へのグローバル人材育成と今後の方向性—英語力強化のための短期特別講座の取り組み—」

池田るり子（産業能率大学）

グローバル人材育成を目指し、大学カリキュラム委員会での検討の結果、2014 年度は、「海外語学研修 A・B」実施初年度となった。ここで



バズセッション

テーマ：「授業設計」「ピア・サポート」
「接遇教育」「グローバル人材育成」「就職支援」

テーマごとにグループに分かれ、活発なバズセッションが行われた。

参加者は、学校での取り組みの成功例や課題などを率直に語り合い、情報共有をはかりながら、有意義な意見交換の時間を過ごした。



た。また、研究会終了後には、自由が丘のレストランに会場を移し、懇親会を行いました。こちらにも活気に溢れた会となりました。

実行委員長として準備不足の点多々ございましたが、こうして研究会を無事に終了できましたのも、ブロックリーダー、サブリーダー、運営委員の皆様、そしてご参加、ご協力いただきました皆様のおかげだと深く感謝しております。誠にありがとうございました。



研究会を終えて

第 42 回関東・東北ブロック研究会実行委員長
関 憲治（自由が丘産能短期大学）

年度末のご多用中にも関わらずたくさんの方々にご参加いただき、第 42 回日本ビジネス実務学会関東・東北ブロック研究会を無事に開催することができました。

研究会は、とても興味深い講演に始まり、助成研究発表、研究発表・実践事例報告、バズセッションと盛りだくさんの内容でしたが、積極的に質問が飛び交い、活気に溢れた研究会でし

事務局より

1. 長らく自由が丘産能短期大学のご協力により関東・東北ブロック研究会を開催させていただきましたが、次回から開催校が変わります。自由が丘産能短期大学と同校の先生方には、開催校として一方ならぬご配慮とご協力を賜りましたことを心から感謝申し上げます。
2. 次回は、試験的に土曜日開催を予定しております。詳細は秋にご案内申し上げますので、よろしくお願いいたします。

日程：2016年2月13日（土）

場所：大妻女子大学短期大学部